

'Intimacy' in the Social Theory of Anthony
Giddens : Autonomy and Intimate
Communication

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 穰彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024940

アンソニー・ギデンズの親密性論

——「自律」を支える親密なコミュニケーション——

藤 本 穰 彦

一、はじめに

本稿は、アンソニー・ギデンズの親密性論を読む試みである。テキストとするのは、一九九〇年代初頭に続けて発表された『近代とはいかなる時代か』（一九九〇）、『モダニティと自己アイデンティティ』（一九九二）、『親密性の変容』（一九九二）の三冊である。¹

友枝敏雄によれば、多岐にわたるギデンズの社会理論は以下の三点に整理されるという。第一に構造化理論の展開、第二にモダニティ論、そして、第三に親密性論である。『先進社会の階級構造』（一九七三）から『社会の構成』（一九八四）にいたるなかで展開された構造化理論や、一九九〇年代初頭に続けて出版された『近代とはいかなる時代か』（一九九〇）からウルリッヒ・ベック、スコット・ラッシュユとの共著である『再帰的近代化』（一九九四）に至るなかで論じられた「再帰性（reflexivity）」を鍵概念としたモダニティ論は、社会諸科学を大いに刺激してきた。他方で、親密性論についての研究は少ないように思われる。²

ギデンズの親密性論が、なぜそれほど注目を集めないのかについては、確固としたことが言えない。ひとつ想像され

る理由として、以下のものが考えられる。³ これまで親密性／親密圏は、公共性／公共圏に對置するかたちで理論化されてきたという点である。ユルゲン・ハーバマスが「公共性の構造転換」(一九六二)のなかで描いた「小家族的親密さの圏」が親密圏の基本型とされてきた。ここでは、愛をメディアとする小家族の共同体として、親密圏が定義されている。⁴ ただし、ハーバマス以降の公共性／公共圏に関する研究動向をレビューした時安邦治は、「皮肉なことに、公共圏への理論的関心から公共圏の成立や変容について精緻な歴史的的研究が進めば進むほど、その問題設定から親密圏の問題はこぼれ落ちていくようである」⁵、と指摘している。

親密性／親密圏の理論的問い直しが求められた。その端緒を開いたのは、斉藤純一である。⁶ 斉藤は、ハーバマスを批判しつつ、以下のように親密圏を再構想する。「公共圏が人びとの〈間〉にある共通の課題への関心によって成立するのに対して、親密圏は具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成される」⁷、と。つづけて、「具体的な他者の生／生命への配慮は、必ずしも性や血縁の結びつきによらない配慮やケアの関係を人びとの間につくりだしている」⁸として、斉藤は、親密圏を「家族という支配的なメタファーから距離を取」⁹って設定する。親密圏を、愛をメディアとする小家族の共同体に限定しないことで、グループ・ホームや自助集団等、血縁や愛情、性愛の結びつきによらないケアや配慮のネットワークの存在を、丁寧にみていくことが可能になった。⁹

一方、ギデンズは、モダニティにおける「親密性(intimacy)」の発現を、公共圏／親密圏の議論とは別のコンテクストにみている。¹⁰ モダニティの影響力は、外的な範囲としては、国家(国民社会)レベルを越え、(資源や生態系サービスを含む)地球規模に達しており、内的には、家族や人々の親密な関係にまで入りこんできている、とギデンズはいう。¹¹ モダニティ原理の外的な拡張性と内向性の両極間の相互結合が強くなっていくプロセスが徹底化した現代社会を、ギデンズは、「高度近代(high modernity)」あるいは「後期近代(late modernity)」とよぶ。高度あるいは後期

近代では、すべての先行する社会秩序の形態と異なる現象が観察される。¹²

ギデンズは、「親密性」を、モダニティの高度化により生じたさまざまな社会変容の一方の極と捉え、個人生活における親密な側面の変化から、グローバルな社会的結合の変容を説明しようとする。ギデンズの親密性論には、関係性にデモクラシーを持ち込み、個人生活の民主化 (the democratizing of personal life) から、現代社会における社会的結合を民主化する戦略が読み取れる。¹⁴ 「親密性」のポテンシャルを問う意義が、ここにあるように思う。

ただし、この企ては簡単に達成されるものではない。ギデンズは、現代社会における自己形成の困難について、以下のように述べている。「私が高度あるいは後期近代とよぶ世界——すなわち、私たちが生きている世界——において、自己は再帰的に形成されなければならない。自己が存在する広範にわたる制度的文脈と同様に。そのうえ、自己形成の課題は、機会と選択肢の多様性に頭を悩ませるなかで達成されなければならない」¹⁵、と。

モダニティの世界に生きることは、どのような実感のうえに成りたっているのか。ギデンズの見立てを確認しておこう。ギデンズは、モダニティの社会学は、二つのイメージによつて支配されてきたという。一つは、マックス・ウェーバーによる官僚的合理性に拘束されていく世界のイメージであり、もう一つは、カール・マルクスによるモダニティという怪物を飼いならし、統制していく (control) イメージである。¹⁶ ギデンズは、これらとは別のイメージとして、「ジャガナート (juggernaut)」を提示する。「ジャガナート、それは巨大出力の無拘束エンジン。人類の力を結集することで、ある程度まで操縦することができるが、突然コントロールが効かなくなる恐れもあり、自らばらばらに解体しかねないようなもの。ジャガナートは、抵抗するものを壊滅し、定まった道すじを着実にたどっているようにみえるときもある。ジャガナートは、私たちが予知できない方向へ、突然方向転換するときもある。ジャガナートに乗ることは、全くもって、喜びのない、価値のないことではない。ジャガナートに乗ることは、しばしば、活気づ

けられ、前途に対する希望が充電される。ただし、モダニティの制度が存続するかぎり、私たちは、旅の道すじもペー
 スもどちらも、完全に統制することは決して出来ないだろう¹⁷。モダニティに生きることが、ジャガナートに乗って生
 きるようなものであるとすれば、個人は、コントロール出来ない疾走感と緊張感を伴って生きることになる。自己形
 成の課題や「親密性」の探究は、このような社会環境下で要請されている。

「ジャガナートに乗った」人々は、いかにして自己アイデンティティを形成し、安定的なものとしているのか。本稿
 では、「親密性」が、「自己」と「関係性」の維持にいかに関与しているのか（あるいは失敗しているのか）を考察す
 る。

以下の順に議論する。まず、ギデンズの個人モデルを考察し、「自己」が再帰的に形成されるメカニズムを示す。次
 に現代社会に特徴的な「関係性」を議論する。以上をうけて、「親密性」が「自己」と「関係性」を支持するメカニズ
 ムを解明する。

二、再帰的プロジェクトとしての「自己」

ギデンズは、デヴィッド・ヘルドに依拠しつつ、「自律 (autonomy)¹⁸」を志向する個人モデルを念頭においている。¹⁹
 ただし、個人の心理システムには、不安 (anxiety) が内在されている。個人は、「自律」を志向しつつも、潜在的な
 不安に苛まれている。不安の源泉は、主な養育者（多くの場合母親）からの分離にあり、不安は、信頼のネガティブ
 サイドである喪失の恐怖 (fear of loss) から引き起こされる。²⁰ 不安は、「放棄された、という感覚によって生み出され
 る敵意と結びつくことで、信頼や希望、勇気と結びつく愛の感情のアンチテーゼ²¹」として機能する。不安は拡散し、
 「特定の対象を欠き、自由に漂う²²」。そのため、個人は、不安を対象化できない。

ギデンズの個人モデルは、再帰的な意識 (reflective awareness) を有している。「モダニティの再帰性は、自己 (the self) の核にまでその影響を拡張してくる。別の言い方をすれば、ポスト伝統的な秩序において、自己は、再帰的なプロジェクト (reflexive project) となる」²³。つまり、「自己」は、「個人の行為システムの継続の結果として与えられるものではなく、個人の再帰的行為のなかで、日常的に創造され、継続されることやもの」²⁴ から獲得され、構築される。ギデンズは、個人が安心して生活できるための (二つの) 条件を、個人の人生や生活と「バイオグラフィ (biography)」との関係に見出す。ギデンズの個人モデルでは、過去・現在・未来を結びつけ、自分の人生を価値あるものとして描くストーリーを、各人が自分自身に語りかけている。個人は、自分自身に起こる出来事を整理し、一貫した「バイオグラフィ」の進行に振り分け (sort into)、位置づけていく作業を常に繰り返しながら、「物語 (narrative)」を構築し、「自律」を維持している。一貫した「物語」を遂行し、有意義な「バイオグラフィ」を進行しているとき、人生や生活における緊張や変化を切り抜けるのに十分な安定感が得られ、個人は「自律」する。

不安は、個人が自分自身について与えている「バイオグラフィ」の脆弱さに直接ダメージを与える。自身の行為 (ふるまい) でも、他者の反応でもなく、特定の物語を遂行しつづける能力こそが、自己アイデンティティの統合と維持にとって問題となる。「バイオグラフィ」を構成する特定の「物語」の遂行が妨げられ、自分自身に語りかける意味のあるストーリーの継続性と統合性を失ったとき、個人は不安状態となり、「自律」を失う。

三、関係性の純粹化

関係性の議論に移ろう。後期近代に特徴的な関係性として、ギデンズは、「純粹な関係性 (pure relationship)」²⁶ を看取している。現代社会では、恋愛、婚姻、友人関係などの関係性は、すべて「純粹な関係性」に近づいていく傾向に

ある、とギデنزは主張する。²⁷「関係性」は、社会的あるいは経済的生活の外在的条件によってつなぎ留められるものではなくなっている。「関係性」は、「自由に漂い (free-floating)」、「開かれた仕方」で、再帰的に形成される」特徴をもつ。²⁸

「関係性」の継続や断絶はいかに行なわれているか。「関係性」は、「相手との緊密なコンタクトからもたらされる感情的満足 (emotional satisfaction) のゆえにスタートし、またそれが続くかぎりにおいて存続する」。²⁹したがって、「関係性」は、「その関係性が、お互いに与えられるもののためのみ、探し求められる」ものとなる。「いくらかでも長続きするすべての個人的関係には、得るところがあるだけでなく試練や緊張がつきものである。しかしそれ自体のために存在している『関係性』においては、相手とのあいだに何か悪いことが起れば、『関係性』そのものが本質的に脅かされる」。³¹それゆえに、「関係性」は、「いつの時点においても、いずれか一方によって、あらかた意志 (will) に基づいて終らせることができる」。³²「関係性」から感情的満足が得られなくなれば、「関係性」は解消する。「関係性」が「純粹」であるというのはこの点を意味している。

ギデنزによれば、「関係性」を十分に長続きさせるためには、コミットメント (commitment) が必要である。だが、無条件にコミットする人は誰しも、『関係性』が解消した場合に、将来大きな苦痛を被るリスクにさらされることになる」。³³「関係性」において、コミットメントは、「努力協定 (effort-bargain)」にしかならず、コミットする人は、「他の可能な選択肢を犠牲にするリスクを受け入れる準備」を行い、傷つくことを覚悟する。³⁴「関係性」を結ぶパートナーは「関係性」解消のリスクを互いに引き受け、「関係性」から得られる意味や満足を常に確認しながら「関係性」を吟味する。このようにして、二人の間の努力と選択の結果として、「関係性」は継続していく。

「関係性」の一例として、ギデنزとともに、愛 (love) について考えてみよう。ギデنزによれば、愛のモデル

が、ロマンティック・ラブ (romantic love) から、コンフルエント・ラブ (confluent love) へと移行しているという。「コンフルエント・ラブは、能動的で、不確定な愛である。それゆえ、『永遠』、『唯一無二』といったロマンティック・ラブ複合体 (romantic love complex) の特質と衝突する。今日の『別居・離婚社会 (separating and divorcing society)』は、コンフルエント・ラブの原因というよりも結果として出現したものである。コンフルエント・ラブが現実的なものになるほど、『特別な人 (special person)』を探すことではなく、『特別な関係性 (special relationship)』を築くことが重要となってくる」と。

ロマンティック・ラブでは、特別な人と、永遠の愛を育むことが志向される。個人は、恋愛を通じて、特別な人を探し、死が二人を分かつまでの愛を育むことを誓い合う。他方、コンフルエント・ラブでは、特別な人を探すことではなく、特別な関係性を共に築くことができる「誰か (someone)」³⁶を探すことになる。コンフルエント・ラブでは、愛情、セクシャリティ、セックス等の性質は、「関係性」の中心ではなく、一要素となり、追求されるもののひとつとなる。³⁷それゆえ、コンフルエント・ラブは、必ずしも、一夫一妻婚的な関係に限定されず、異性愛や同性愛のモデルともなりうる。

ロマンティック・ラブには、「性の二重規範や性別役割分業の規範が内面化」³⁸されており、ロマンティック・ラブ複合体が形成されやすい。ロマンティック・ラブ複合体は、女性にたいして抑圧的に機能する。他方、コンフルエント・ラブでは、お互いが、自らの感じていることを伝え合い、満足のいく関係性を築き上げるよう、日々、努力することになる。コンフルエント・ラブの「関係性」は「純粹な関係性」であり、自由で平等なものとなりうる。ただし、この「関係性」には、双方が、よりよい関係のあり方を相談（ときに葛藤）しながら、努力して、築かなければならないという負担がある。それでも、ギデンスは、ロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへの移行を歓迎する。

コンフルエント・ラブの愛のモデルが、双方の合意に基づく自由なライフスタイルやよりよい関係の探究や、解決されそうにない不平等を伴った関係からの離脱を促していくことを、ギデنزは評価しているからである。

四、「関係性」の失敗と回復

「関係性」の失敗と回復メカニズムについて考察しよう。「関係性」は、嗜癖 (addiction) になると失敗する。³⁹「関係性」の失敗は、「バイオグラフィ」の統合性を脅かし、個人は「自律」を失う。「ある確立された関係性の解消に対する反応の激しさは、しばしば、戦争神経症によって引き起こされる苦痛とほとんど同程度に激しく、また、回復にも同様の長い時間を要する」。⁴⁰ 損なわれた「物語」を書き換え、「バイオグラフィ」の統合性を回復することは容易ではない。

「物語」の書き換えに失敗すると、すでに破綻している「物語」を再履行することになり、悪循環に陥る。破綻した「物語」から生じる不安を鎮めようとして、何らかの習慣や行動に執着すると、衝動強迫性 (compulsiveness) が増す。衝動強迫性は、自分の意志で止めることは非常に難しく、常態化すると嗜癖となる。⁴¹ 嗜癖状態では、「私は駄目な人間である」、「私は失敗者である」、「自分にはそんなことができるはずもない」、「うまくいかないのはわかっている」と、個人は、自己の「物語」を否定的なものに書き換え続けてしまう。⁴²

しかし、この悪循環は、一度陥ったら回復できないというものではない。嗜癖から回復し、再び「自律」を取り戻し、「関係性」の構築へとむかう回路がある。⁴³ 回復過程では、否定的な「物語」を肯定的なものへと書き変える訓練が行なわれる。個人は、不安の源泉と向き合い、過去の苦しい体験を反省的に回想する。この作業は心理療法のプログラムでは、ボトミング・アウト (bottoming out) から自己内対話 (self talk) への段階とよばれる。⁴⁴ 自己内対話を契

機として、個人は、自分のおかれている状況理解が可能となり、自身の「物語」を、「私は愛すべき人間である」、「私は魅力的である」といった肯定的なものに書き換えていけるようになる。⁴⁵「自己内対話は、プログラムの書き直し、つまり、すでに確立しているルーティーンが、新たな仕方と考えられるべきなのか、もし可能ならば、放棄されるべきなのかを検討する手段となる」。⁴⁶自己内対話は、「再帰的注意 (reflexive attention)」を発達させる基盤となり、個人は、選択が可能であるという認識を獲得していく。⁴⁷「再帰的注意」を発達させた個人は、「物語」を書き換え、「バイオグラフィー」の遂行を再び安定的なものとし、「自律」と「関係性」の再構築へとむかっていく。

五、「親密性」のポテンシャル

「関係性」は「親密性」に集中する。「親密性」は「双方が到達するかもしれない、長期安定の第一条件である」。⁴⁸「関係性」において「親密性」は、「相互間の平等という面において、他者との、および自己との、感情的なコミュニケーションの問題」⁴⁹となり、自律した個人間の「取引交渉 (transactional negotiation)」⁵⁰として焦点化される。

親密なコミュニケーション (それは、自由で平等なコミュニケーションとなる) は、「関係性」を作り出す。「自律」した個人間でなされるコミュニケーションでは、双方が、相手に敬意を払い、素直に心を開くことが要求される。「親密性」は、個人が、広く公にはしたくないと秘めている感情や行為の暴露を求める。⁵¹自分の本心を開示することは、自分がどういう人間で、相手はどういう人間かを理解し合う端緒を開いていく。親密なコミュニケーションがある程度蓄積され、「関係性」からの感情的満足が得られると双方が期待し、「賭けてもいい (gamble)」⁵²と思えた時、「関係性」がスタートする。⁵³「関係性」が成立するときには、「関係性」を失うリスク、喪失の痛みに耐える覚悟を、双方が受け入れている。「関係性」は、親密なコミュニケーションによる「取引交渉」の結果として、選択的に築かれる。

「関係性」において交わされる親密なコミュニケーションの蓄積は、「共有された歴史 (shared histories)」を構築する。「共有された歴史」は、「当事者のライフプラン・カレンダー (life plan calendars)」をどの程度まで統合しているかの観点から創造され、また維持される。「共有された歴史」は、遂行中の「物語」を強固なものにし、自己についての「バイオグラフィ」の進行を安定的なものにすることに寄与する。このようにして、「共有された歴史」は、「共通の社会的ポジションの徳 (virtue)」によって得られる経験を共有した個人間よりも、潜在的に、より堅く結びつく基盤を、「自己」と「関係性」の双方に与える。⁵⁴

六、結語

モダニティ原理が徹底化された社会環境下に生きている私たちは、いかにして自己を形成し、「自律」を維持しているか。本稿では、「親密性」は、「自己」と「関係性」の維持や強化に、いかに寄与しているのか（あるいは失敗しているのか）と問いを立て、ギデンズの社会理論を再構成することで考察してきた。その結果、「親密性」が「自己」と「関係性」を支持するメカニズムを解明した。

ギデンズにとって「親密性」とは、愛をメディアとした結合ではなく、「関係性」を創り出す親密なコミュニケーションである。「親密性」を可能にする条件は、個人の「自律」である。「自律」したパートナー間での「関係性」をめぐる「取引交渉」の結果、「関係性」は、選択的かつ再帰的に構築される。親密なコミュニケーションが成立している「関係性」では、どちらかが「自律」の維持に失敗しても、パートナーがその失敗や嗜癖に気づかせてくれる。人々は「関係性」のなかで、親密なコミュニケーションを通じて「自律」の失敗を、相互チェックできる。このようにして、しばしば個人的な問題とされがちなることを、個人を超えた「関係性」の問題としてとらえる視野が拓かれる。

「親密性」の失敗や破綻、「親密性」を可能とするメカニズムについての理論的考察が、今後の課題である。この理論的課題を乗り越える試みのなかで、現代社会における新たな社会的紐帯としての「親密性」というアイディアは、より現実味を増していくことになるだろう。

【注】

¹ 以降の論述のなかで、これらの著作の引用・参照箇所を示す際には、*The Consequences of Modernity*, Polity, 一九九〇年は“CM”, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 一九九一年は“MSI”, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press, 一九九二年は“TI”と、略記号を用いる。

² 友枝敏雄、「モダニティの社会学理論——ギデンズを中心に」、友枝敏雄・厚東洋輔編、『社会学のアリーナへ——二一世紀を読み解く』、二〇〇七年、東信堂、九一—一〇頁。友枝は別の論考で、ギデンズの親密性論について以下の指摘を行なっている。『純粹な関係性』がなぜ紐帯として弱いのかということについては、ギデンズは述べていない。『いかなる相互行為メカニズムが紐帯として強いのか、それとも弱いのか』という点については、理論的に検討する必要がある（友枝敏雄、「第二の近代と社会学理論」、宮島喬、船橋晴俊、友枝敏雄、遠藤薫編、『グローバルリゼーションと社会学——モダニティ・グローバルリティ・社会的公正』、ミネルヴァ書房、二〇一三年、一八一—一八二頁）。本稿は、この理論的批判に応える試みとしても位置づけられる。

³ このほかに指摘されている理由として以下のものがある。社会学理論の領域におけるこれまでのセクシャリティ論、ジェンダー論が数少ない特定の視点から研究されてきたため、従来の視点と距離をとるギデンズの親密性論と接続しない、という点である（時安邦治、「ギデンズのセクシャリティ論——社会学理論の再ジェンダー化という視点から」、『年報人間科学』第二〇号一巻、一九九九年、七九—九五頁）。

⁴ Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 一九九〇年（＝細谷貞雄、山田正行訳、『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究【第二版】』、未來社、一九九四年、六六—六九頁）。

5 時安邦治、「研究動向」問い直される公共圏／親密圏、「社会思想史研究」、第二八号、二〇〇四年、七八頁。

6 斉藤純一は、親密圏の概念を用いる意味を以下のように論じている。「親密圏 (intimate sphere)」というあまり一般性のない言葉を使うのは、後に触れるように公的領域と私的領域という従来の区別の設定が意味を失っているからでもあるが、この言葉は、日常生活のなかに潜在的に存在する人称的なコミュニケーションあるいはそのネットワークに光を当てる上で一定の利点ももっている。孤立した群集とそれが生み出す社会的病理に照準する大衆社会批判が軽視していたのは、この「親密圏」におけるコミュニケーションがもつ批判のポテンシャルにほかならない」(斉藤純一、「批判的公共性の可能性をめぐる——親密圏のポテンシャル」、『モダーンとポスト・モダーン』、木鐸社、一九九二年、二〇三頁)。

7 斉藤純一、「公共性」、岩波書店、二〇〇〇年、九二頁。

8 斉藤純一、「まえがき」、「親密圏のポリティクス」、ナカニシヤ書店、二〇〇四年、v頁。

9 京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」(二〇〇八—二〇一三年)の成果が、シリーズ『変容する親密圏と公共圏』(京都大学学術出版会)として公開されており、公共圏と親密圏の架橋にむけた経験的研究が充実してきている。

10 斉藤純一は、ハーバマスに言及した後、「親密圏を小家族における愛の空間としてとらえる見方は、イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズにも共通している」(斉藤、前掲書、二〇〇〇年、八九頁)として、ギデンズをハーバマスに準拠させる。しかし、本稿では異なるギデンズ解釈を提示する。

11 モダニティは、グローバル化していく傾向を内在的に有している、とギデンズはいう(CM,六三頁)。CM,一一四—一九頁と合わせて参照。この二箇所を論拠に記述している。

12 MSI,一—三頁。

13 MSI,三二頁。「モダニティの高度化によってもたらされた時間—空間の分離レベルは、あまりにも広範にわたる。そのため、人類史上はじめて、『自己』と『社会』がグローバルな環境 (milieu) において相互連関するに至った」(MSI,三二頁)、とギデンズはいう。

14 「終章のタイトルは、『デモクラシーとしての親密性』(Intimacy as Democracy) である。

15 MSI,三頁。

16 CM, 一三七一—一三八頁。

17 CM, 一三九頁。「ジャガナート」の由来についてギデンズは注を付している。以下その部分を訳出して確認する。「この術語（ジャガナート）は、ヒンドゥー教において、『世界の支配者』を意味する“Jaganatha”に由来する。それはクリシュナの敬称である。ジャガナートの神像は、毎年、大きな山車に乗せられ、街中を引き回される。信者たちは、みずからすすんで山車に身を投じ、車輪の下敷きになったと言われている」（CM, 一三九頁、引用括弧内は筆者が加筆）。

サンسكريット語辞典によれば、“Jaganatha”は、世界や宇宙を意味する“Jagata”と、指導者や支配者を意味する“natha”からなる語である（MONIER-WILLIAMS, M. *A Sanskrit-English dictionary: Etymologically and philologically arranged with special reference to Cognate indo-european languages*, Oxford, The Clarendon Press, 一八八九年 <http://www.sanskrit-lexicon.uni-koeln.de/scans/MWScan/2014/web/index.php>, 二〇一七年三月三十一日最終アクセス）。

18 「自律」とは、「自己再帰的で、自己決定的である個々人の能力」（ET, 一八五頁）である。

19 MSI, 二一〇—二一四頁。ET, 一八四—一八八頁。ギデンズは、David Held, *Models of Democracy*, Polity, 一九八七年に依拠して、個人の基本的行動モデルに「自律」を位置づける。なお、ETの終章について、「私（ギデンズ）はこの章の最初の節を、ヘルドの議論に密接に依拠しながら進める」（ET, 二〇三頁、括弧内筆者加筆）として、「親密性」は、個人の「自律」を前提に構成されることが示されている。

20 MSI, 四六頁。

21 MSI, 四六頁。

22 MSI, 四四頁。

23 MSI, 三二頁。再帰的プロジェクトとしての「自己」の課題を、ギデンズは以下のように述べる。「個々人の人生の変遷は、超自然的な再組織化、つまり、伝統文化において通過儀礼のかたちでしばしば儀式化されるものを、常に要求する。ただし、集合的なレベルにおいて、世代から世代へと移っても、多かれ少なかれ、ものごとは同じであり続けるような伝統社会においては、（個人が青年期から成年期へと移ったときのような）アイデンティティの変化は、はっきりと固定されたものであった。対照的に、モダニティの環境下では、変容する自己は、自己の変化と社会の変化とを結びつける再帰的なプロセスの一部として、探究され、構築される」（MSI, 三二—三三頁）。

24 MSI,五二頁。ギデンズは、再帰性を、モダニティ固有のダイナミズムを引き起こす主要因であるとして、以下のように述べている。「近代社会生活の再帰性は、社会的実践が、まさに、その社会的実践によって生じる情報に照らして、常に吟味され、改善されるという事実のうちに在る。ゆえに、社会的実践は、その特性を常に変化させているのである」(MSI,三八頁)。

25 MSI,五三一—五四頁。

26 MSI,八八頁。以降、特に記載が無い場合は、「関係性」は「純粋な関係性」と同義にもちいる。また、「関係性」に関する議論は二者関係を念頭にすすめる。

27 MSI,八七頁。

28 MSI,八九—九二頁。

29 MSI,八九頁。

30 MSI,九〇頁。

31 MSI,九〇頁。

32 TI,一三七頁。

33 TI,一三七頁。「コミットメントは、純粋な関係性において中心的な働きをする。・・・中略・・・純粋な関係性の内部において、コミットメントは、前近代において緊密な個人的つながりが果していた外的繋留と、本質的に置き換えられるものである」(TI,九二頁)。

34 MSI,九三頁。

35 TI,六一—六二頁。

36 TI,六二頁。

37 TI,六二—六三頁。

38 TI,一四六頁。

39 TI, Chapter5 Love, Sex and Other Addictions 及び Chapter6 The Sociological Meaning of Codependence を参照。

40 TI, 一〇二—一〇三頁。

41 TI, 七一頁。

42 II, 一〇一頁。

43 II, Chapter 6 に具体的なプロセスと事例がまとめられている。

44 II, 九一頁。

45 II, 一〇一頁。

46 II, 九一頁。

47 ギデンズは以下のように述べている。「選択は、自己の本質を直接的に表している。それは明らかだ。ある人が欲するものは、その人が何者であるかを明確にする」(II, 九二頁)。

48 MSI, 九四頁。

49 II, 一三〇頁。

50 II, 三頁。

51 II, 一三八頁。

52 II, 一三八頁。

53 ギデンズの以下の議論からも論拠を補強できる。「関係性」において、個人は、単に他者を承認するのではない。また、他者の反応のなかに、自己アイデンティティが肯定されるのを見出すわけでもない。むしろ、自己アイデンティティの形成は、自己の探究と他者との親密性の発展とを結合するプロセスを通じてやってのけられる」(MSI, 九七頁)。

54 MSI, 九七頁。

【付記】

本小論は、第三九回静岡哲学会(二〇一六年十一月三日、静岡コンベンションアーツセンター)における同タイトルの報告レジューメを基に、当日のディスカッションを反映し、加筆・修正したものです。研究発表および論文執筆の機会を与えて頂きました静岡哲学会の皆さま、竹之内裕文先生(静岡大学農学部)、堂園俊彦先生(静岡大学人文社会科学部)に感謝申し上げます。

(ふじもと　ときひこ　静岡大学農学部准教授)